



284号

2023/6

日中文化交流市民サークル'わんりい'  
町田市三輪緑山 2-18-19 寺西方  
〒195-0055 ☎ : 044-986-4195  
<http://wanli-san.com/>  
eメール:t\_taizan@yahoo.co.jp



黒地の晴れ着を羽織ったギャロンの娘さん：彼女の実家はギャロンの豪族の一人が古くから本拠を構えていた小金県中部に在り、平地では要塞のように頑丈な石造りの大きな家が多いのですが、山手に在る実家はギャロンと果洛蔵族自治州の一部で時々見掛ける一見華奢な半分石造りで半分木造りの4階建て(場所によって3~5階建て)で、家系の古さを感じさせます。(四川省小金県 2001年3月 撮影：姑娘山自然保護区管理局特別顧問 大川健三)

'わんりい' 2023年6月号の目次は16ページにあります

今月の言葉も、日本では四字成語そのままではなく「懸河の弁」<sup>けんが</sup>として使われています。

「立て板に水」という意味です。因みに懸河とは、川床が周りの土地よりも高くなった川、いわゆる「天井川」<sup>てんじょうがわ</sup>のことで、このような川は、一たび堤防が決壊すると、川の水がそのまま溢れて流れ下るようで、大量の水が流出します。

・>・>・>・>・>

晋の時代、非常に有能な郭象<sup>かくしょう</sup>という人がいました。彼は知識が広く深いので、みんなの尊敬を一身に集めていました。

皇帝は彼を朝廷で軽い役職を与えて侍らせ、何か事があると彼の意見を求めるのですが、郭象もまた喜んで自説を披露するのです。

大臣の王衍<sup>おうえん</sup>は、「郭象が話をする様子は、まるで滔々と流れて留まることが無く、永遠に枯れることの無い川の流れのようだ」と形容しました。

そこから変化して、現在我々が普段使っている「懸河の弁」という言い方が出来上がりました。

・>・>・>・>・>

**言葉の意味：**水が滝を流れ落ちるように、話が止まることがないこと。雄弁を形容する言葉。

**使い方：**販売員が立て板に水とまくしたてようが、商品をどんなに華やかに陳列しようが、我々が心を動かすことはない。

・>・>・>・>・>

このお話に登場する郭象（252年～312年）は、西晋の時代、当時流行していた清談で論客として知られていました。清談とは、漢代末期から西晋にかけて続いた乱世に知識人たちが、世俗を離れて老荘思想の無為自然の境地を理想とする論議を重ねたことを指すようです。中国では知識人と言

えば、文化を担い、政治に携わって世の中の安定に寄与する役目を期待されていますが、そんな人たちが政治を投げ出して、酒を飲み、琴を弾じて浮世離れした論議に明け暮れたのですから、乱世が続く原因となったのだと言われても仕方のない処です。しかし、彼らから云わせれば、一族の中の権力闘争（八王の乱）などに付き合っていられないという事情もあったのでしょう。

ところで、ここに登場する郭象は、老荘思想を論じると止まるところを知らず、立て板に水のように語るので、西晋の大臣王衍が「（その弁舌は）懸河の水があふれるがごとく、次から次へと注がれ枯れることがない」と評した（「懸河の弁」）と言われ、後世この言葉が生まれたそうです。

郭象は清談を楽しんでいましたが、ある時から朝廷に出仕することになり、国王から諮問を受けるよう

な身分になると、権勢を笠に着て威張り散らすようになり、周囲の人人から輦蹙を買い、「史記」列伝の中では「郭象は軽薄な人間」とまで言われているそうです。

清談と云うと「竹林の七賢」を思い出し、高尚なサロンのような印象を持ちますが、これは後世の創作で、当時は彼ら全員が一堂に会することは考えられないと言われています。そして、現実を逃避して議論していても、中には、意としない政争に巻き込まれて命を落とす人も出ているそうです。清談と言えども、決して「現実逃避の場」ではなかったようです。

古代中国の政治は、話す言葉が重く取り上げられ、その責任は命で贖わなければならない、真に命がけの世界だったのですね。



挿絵：満柏画伯

# 唐寅の七言絶句『画鶏』

桜美林大学名誉教授 植田渥雄

唐寅(1470~1523)は明代中期を代表する文人の一人です。呉県(江蘇省蘇州)の人で、徐楨卿、祝允明、文徵明と共に《呉中四才子》と呼ばれていましたが、自らは風流第一才子と称していました。この時代の風流とは書画音曲などの高級趣味のほか、多くの場合遊蕩三昧の世界を指していました。自ら認める相当なモテ男だったようです。後に短編小説や芝居の主人公として登場することもありました。

字は伯虎。商人の出自でしたが、幼い頃から才気煥発で、多くの文人子弟と交わり、自由気ままな生活を送っていました。後に友人の勧めを受けて学問に励み、科挙の地方試験(郷試)に首席で及第。将来を嘱望されましたが、翌年に行われた中央試験(会試)で不正事件に巻き込まれ失格します。以後は仕官の道を諦め、詩文、書画に没頭し、文人画家として名を残しました。

huà jī  
画 鶏

táng yín  
唐 寅

tóu shàng hóng guān bú yòng cái  
头上红冠不用裁  
mǎn shēn xuě bái zǒu jiāng lái  
满身雪白走将来  
píng shēng bù gǎn qīng yán yǔ  
平生不敢轻言语  
yī jiào qiān mén wàn hù kāi  
一叫千门万户开

- \* 画鶏=鶏を描く。この詩は自ら描いた鶏の絵に題したもの。\* 紅冠=赤い冠。ここでは鶏冠を暗示している。
- \* 不用裁=手を加えて裁断する必要がないこと。
- \* 雪白=雪のように真っ白。
- \* 走将来=歩み寄って来る。この時代の俗語表現。
- \* 轻言语=軽々しく口を利く。
- \* 千门万户=たくさんのお家々

〔訓読〕

頭上の紅冠裁を用いず  
满身雪白走みて来る  
平生敢て軽々に言語せざるも  
一たび叫べば千門万户開く

奇抜な出だしもさることながら、近景から遠景へ、視覚から始まり聴覚に移っていく構成はまるで動画を見るようで実に見事ですね。

作者はとかく奇行の多い人物として有名でしたが、この詩と一連の自作画像を並べてみると、内心では清廉潔白で公正無私、統率力のある理想的な君子像に憧れていたようです。

〔和訳〕

赤い冠地肌に付けて  
白装束でやって来る  
余計な口は利かずとも  
一声で千の雨戸が皆開く



唐寅像部分、張靈作(明代画家)(ウィキペディアより)

れい てい よう す  
文天祥の『零丁洋を過ぐ』

報告:花岡風子

今回のお題は中国、南宋の重臣、文天祥（1236～1283）の『零丁洋を過ぐ』という七言律詩でした。文天祥は元朝の支配に抵抗した英雄として知られています。江西省出身で、20歳の時に科挙に首席で合格（状元）するほどの天才でしたが、生まれた時代が悪すぎました。

北方ではフビライハン率いる元軍が契丹族、女真族等の北方諸民族を平定し、南宋の首都臨安に迫っていました。これに対してもともと軍事的に弱体であった宋王朝内では妥協派と抗戦派が私利私欲のために入り乱れて権力闘争に明け暮れる有様で、王朝の命運はまさに尽きようとしていました。この中であって、文天祥は最後の最後まで戦い続けた悲劇の将軍でした。

忠義と公正を重んじた文天祥の生き様は日本の武士道精神、忠君愛国思想にも通じるところがあり、水戸藩の儒学者藤田東湖をはじめ、吉田松陰などの尊王攘夷思想にも大きな影響を与えました。こんな優秀で気骨のある人だから、フビライハンも再三にわたって自分の配下に加わるよう説き伏せようとしませんが、拒否し続けて、ついに刑死を選びました。

恥ずかしながら、私は今回初めて文天祥の存在を知ったので、CCTV でかつて放映された文天祥の生涯の解説番組を見てみましたが、私財を擲って戦いに挑んだばかりでなく、忠義のために、どう考えても勝ち目のない戦に何度も何度も挑戦し、命を捧げた人生でした。「この詩の最後の聯にあるように、歴史に名を遺すために死んでもいいという考えはカッコいいにはカッコいいが、今の価値観とはかけ離れているので、今の人がこの生き方をどう評価するか、ちょっと難しいところですね。『歴史は時代を映す鑑』と考える儒教的歴史観の一環という所でしょうか。日本の武士道精神や尊皇思想とも少し違うようですね」と植田先生。

この詩は、投降の要請に応じなかった文天祥が4

年間戦い続けたのち捕らえられ、北方の大都（今の北京。元の首都）に連行される途中に作ったものと言われています。零丁洋とは最後に捕らえられた広東省珠江の河口付近の海の通称でした。寂しくさ迷い歩く海辺という意味でしょうか。

では、内容を見てみましょう。

零丁洋を過ぐ 文天祥

しん く そうほういっけい  
辛苦遭逢一經より起る

私の人生の苦難は、そもそも経書を読んで学問に志したときから始まった。

かん かりらく ししゅうせい  
干戈落落たり四周星

実際に戦いに出たあとは相次ぐ負け戦で、実に寂しい4年間だった。

さん が はさい かぜじよ  
山河破碎して風絮を漂わせ

国土は戦禍に荒れ果て、柳絮がただ風に舞うばかり。

ひょうよう ひょう  
身世飄搖として雨萍を打つ

我が身は海辺をさすらい、まるで雨に打たれた浮き草のようだった。

こうきょうたんべん  
皇恐灘辺皇恐を説く

4年前には皇恐灘のほとりて、国家の滅亡の恐れを説いて兵を募ったものだ。

\*皇恐灘とは、最初に兵を挙げた江西省にある早瀬の名。急流のため船頭を恐れさせたので、この名がある。

れい てい よう り れい てい  
零丁洋裏に零丁を嘆く

だが今は零丁洋の海に臨んで孤独にうち沈むこの身を嘆くばかり。

いにしえよ たれ  
人生 古 自り 誰か 死無からん

人間どうせ一度は死ぬもの。

たんしん りゆうしゆ かんせい  
丹心を留取して汗青を照らさん

せめて純粋な心を〈歴史の鑑〉に留めておきたいものだ。

\* 汗青とは、史書を指す。昔、竹簡を火であぶり水分を抜き、その上に文字を書いたのでこのように言う。

なんとも辛い状況ですね。でもどうせ死ぬなら、丹心(赤心。純粋な心)を歴史に留めておきたい、という強い意志は、なんと海を越えて幕末の志士たちにも影響を与えました。文天祥は刑死する前に『正気(せいき)の歌』と称する古詩を遺していますが、前述の藤田東湖もこれに唱和する詩を作っています。

元のフビライハン(元寇)は、元寇として二度も日本に攻めてきましたね。海を越えてまでも日本に兵を派遣できるほどだったのですから、どれだけ勢力が強かったことか。元寇という歴史的体験を持つ日本人なら、陸続きで当時強大な元と対峙しなければならなかった南宋の窮状に思いを馳せることができますね。

さて、詩人としての文天祥は、杜甫の詩が大好きで、杜甫の詩句のあちこちを切り取って、『集杜詩』という、自分のオリジナルの詩句はまったくないものの、一首ごとの詩がそれぞれ独立した作品の形を成している、という変わった詩を作ったりしています。

「自作の詩にも杜甫の影響が見えます。『皇恐灘(こうなん)辺(べ)皇恐(こうこう)を説く、零丁(じやうてい)洋(やう)裏(うら)に零丁(じやうてい)を嘆く』など、深刻な内容にもかかわらず、取りようによっては自虐的ともいえる、ある意味しゃれをかましたような対句表現に、詩人としての真骨頂(まこてい)を感じさせますね。また『山河(がは)破碎(さいさい)して風絮(ふうきょ)を漂(ひら)わせ』もどことなく杜甫の『国破(こくは)れて山河(がは)在(あ)り』を彷彿(ふふ)とさせます。こんなところにも杜甫からの影響(えいぎょう)が垣間(かま)見(み)えます」と、植田(うゑだ)先生(せんせい)。

一見(いちげん)鬼将軍(きしやうぐん)という印象(いんげん)を受ける文天祥(ぶんてんしやう)ですが、妻子(しよし)もいたようで、一人(ひとり)の男性(なんせい)としてはどんな人(ひと)だっ

たのかと気(き)になりました。

今回の詩(し)を鑑賞(かんしやう)した後(のち)、メンバーの皆さん(みなさん)から感想(かんしやう)や質問(しつもん)が続き、その中で漢詩(かんし)とは何(なに)なのか、という皆さんの感想(かんしやう)もでてきました。そのなかで「漢詩(かんし)から生きるヒント(ひんと)をもらえる」とお話(おはなし)された方もいました。植田(うゑだ)先生(せんせい)は「同じ読者(よみ)でも、読むたび(たび)、また違う感想(かんしやう)が湧(わ)いてくるんですよ」とも仰(おほ)っていました。同じ詩(し)を鑑賞(かんしやう)しても、受け取る感覚(くわんかく)が人(ひと)によっても時期(じき)によっても微妙(びょうびょう)に違う、これこそ漢詩(かんし)の魅力(みちり)なのか、と思った次第(しだい)でした。古いけれど新しい、そして新鮮(しんせん)さも味わ(あじ)える。そんな漢詩(かんし)をご一緒(ごいっしょ)に学(まな)んでみませんか？

guò líng dīng yáng  
过 零 丁 洋

wén tiān xiáng  
文 天 祥

xīn kǔ zāo féng qǐ yì jīng  
辛 苦 遭 逢 起 一 经  
gān gē luò luò sì zhōu xīng  
干 戈 落 落 四 周 星  
shān hé pò suì fēng piāo xù  
山 河 破 碎 风 漂 絮  
shēn shì piāo yáo yǔ dǎ píng  
身 世 飘 摇 雨 打 萍  
huáng kǒng tān biān shuō huáng kǒng  
皇 恐 滩 边 说 皇 恐  
líng dīng yáng lǐ tàn líng dīng  
零 丁 洋 里 叹 零 丁  
rén shēng zì gǔ shuí wú sǐ  
人 生 自 古 谁 无 死  
liú qǔ dān xīn zhào hàn qīng  
留 取 丹 心 照 汗 青



「零丁洋」別称「伶仃洋」の位置(百度百科から)

## 黄帝祭典の開催

文＝村上直樹

前回(5月号)では去る3月28日に発表された「2022年度全国十大考古新発見(発見)」を話題としてとりあげた。この選定事業は1990年に始まったが、2009年には河南省安陽市曹操高陵(三国時代、河南省安陽市安陽県安豊郷西高穴村、担当機関は河南省文物考古研究所)が選ばれている。この発見については「雑感」(2020年11月号)でも少し詳しく取り上げた。

報道によるとこのほど同地に立派な博物館(安陽曹操高陵遺跡博物館)が完成し、GWに入った4月29日に一般公開された。発掘された曹操の墓を保護する形で造られた縦横140×120メートルという巨大な建築物の中には500点余りの文物が展示されている。入場は予約制で入場料は一般が50元(約1,000円)。団体が40元、学生は半額であるほか、12歳以下の子供と61歳以上の高齢者は無料などさまざまな優待がある。

おもしろいことにその場で曹操の詩歌を暗唱できた人は無料だそうである。具体的にどのように実施されているのか詳しいことはわからないが、一流の詩人でもあった曹操が作った詩歌ならどれでもよいのだろうか。たとえば『三国演義』には「対酒当歌、人生幾何・・・」(酒に対してまさに歌うべし、人生幾何ぞ——日本語は小川環樹・金田純一郎訳『完訳・三国志』岩波文庫による)と、曹操が「赤壁の戦い」の前夜、酒宴の席で歌った「短歌行」が出ている(第48回)。この歌などは4月27日の開館式典で94年版テレビドラマ『三国演義』で曹操に扮した名優・鮑国安が朗読しているから、当然、無料対象と思われる。

ところで『三国演義』のこの場面では地方行政官として功績のあった劉馥がこの歌の「月明星稀，烏鵲南飛；繞樹三匝，無枝可依。」(月は明らかに生まれにして、烏鵲南に飛ぶ。樹を遠ること三匝なれども、枝の依るべき無し。)の部分不吉ではないかと指摘した(戦いの帰趨が定まらないという意味にとれるからか?)のを曹操が怒って劉馥を刺し殺してしまい、酔いのさめた翌日たいそう後悔する。新博物館オープンという慶事にはやや場違いな気もする(なお、

「赤壁の戦い」については『わんりい』先月号で寺西俊英さんが題材にとりあげている)。

さて、曹操博物館開館の1週間ほど前の4月22日には河南省にとって、あるいは中国全体にとっても年に一度の重要な行事が催された。「黄帝故里拜祖大典」(黄帝祭典)である。毎年、黄帝的誕生日である旧暦の3月3日に出生地の河南省鄭州市新鄭市で開催される。前漢時代に司馬談・司馬遷親子によって編纂された『史記』全130編には本紀12編として歴史上の帝王を中心に彼らの言動、各時代の政治、経済、軍事、文化、外交等が記述されている。その第1編「五帝本紀」は、相次いで天子となる5人の首領、すなわち黄帝、顓頊、帝嚳、堯、舜が対象である。黄帝はその筆頭であり名が軒轅であるため軒轅黄帝とも呼ばれる。

五帝に先立つ神話時代については唐代に司馬貞が『史記』に補筆した「三皇本紀」に書かれている。ここで三皇とは伏羲、女媧、神農(炎帝)を指す。彼らは人間ではなく、伏羲と女媧は蛇身人首、神農は人身牛首として描かれている。司馬談・遷の『史記』本体には神農の子孫の世は諸侯が争い乱れていたのを黄帝が最終的に蚩尤を破って安定させたという記述はあるものの、史実のみを扱うという編纂方針から三皇は登場しない(三皇五帝として誰を含めるかについては諸説ある)。それにしても、現在、鄭州市の「鄭州黄河風景名勝区」にある巨大な炎黄二帝像(「雑感」2021



曹操高陵遺跡博物館全景(『新華視点』2023年4月28日より)

年3月号参照)では炎帝も立派な人間である。どのような経緯で牛から人へ変わったのであろうか。

黄帝は中華民族(華夏民族)の祖と見做されており、中国人は数千年来、自らを「黄帝子孫」あるいは「炎黄子孫」と位置づけている。黄帝を崇拜する習慣は古代から続いて来たが国・地域をあげての一大イベント化したのは近年のことである。まず1990年代に新鄭県(当時)あるいは鄭州市が主催する形の文化活動となり、2006年3月に「黄帝故里拜祖大典」として格上げされて河南省の重要な文化活動となった。その後2008年6月7日には国務院により「第一批国家級非物質文化遺産擴展項目」(第1次指定国家級無形文化遺産擴大展開プロジェクト)の1つに認定された。

この認定は、伝統的舞踊・音楽・演劇・工芸技術・祭礼等の無形文化遺産を消失危機から保護し、次世代へ伝えていくための国際的な協力・援助体制の確立を目的とするユネスコの「無形文化遺産の保護に関する条約」(2006年4月20日発効)に2004年8月中国が加入したことを契機として国務院が発出した「關於加強我国非物質文化遺産保護工作的意見」(我が国の無形文化遺産保護活動を強化することに関する意見)に基づく活動の一環である。その基本的な考え方は「保護為主、搶救第一、合理利用、伝承發展」(保護を主、救出を第一とし、合理的に利用し、伝承發展させること)であり、民間伝説、伝統舞踊、伝統演劇など計147のプロジェクトが選定されている。

「黄帝祭典」は民俗部門計15件のうちの1つである。因みに他には、「炎帝祭典」(申請機関:陝西省宝鷄市)、「媽祖祭典」(天津皇会、天津市民俗博物館)、「那達慕(ナダム)」(青海省海西モンゴル族チベット族自治州、新疆ウイグル自治区和静県)などが含まれている。なお、同様の趣旨から2006年5月20日には国務院より「第一批国家級非物質文化遺産」(計518件)も公表されている。

さて、今年の式典であるが、統一テーマは引き続き「同根同祖同源、和平和睦和諧」であり、世界中の30の国と地域から2,500名の華人・華僑の代表が参加した。中国政府を代表して、全国人民代表大会常務委員会副委員長の洛桑江村氏、全国政治協商会議副主



「黄帝故里拜祖大典」(2023年4月22日)日本河南同郷会 HP より

席の高雲龍氏など、河南省政府からはトップの河南省共産党委員会書記の樓陽生氏、省長の王凱氏らが参列した。副委員長の洛桑江村(ロサン・ギェンツェン)という名前は珍しいと思って調べてみると同氏はチベット族である。偶然かもしれないが、中央政府の代表として少数民族のロサン氏が参加したのは中華民族を広く捉えてその一体感を示す式典に相応しいと言えるかもしれない。

実況発信を含むネット報道によると式典は午前9:50に始まり、礼砲、献花、拝礼のほか、香港・台湾・マカオおよび内地の歌手、56民族の演劇員による歌と舞踊も華やかに披露され、平和の象徴であるハトが大空に放たれた。当日はあいにく小雨が降りしきっていたようであるが、10:40には今年の大典もつつがなく終了した。

おそらく今の日本でこのような式典が行われると、それ自体を外から見ようと観光客や地元住民が現地に大量に押し寄せ、警備員に囲まれた中でスマホによる写真撮影に余念がない、というような光景になりそうであるが、黄帝祭典ではそうした様子は全く見られない。中国でも観光利用目的のイベントは多く開催されているが、やはり趣旨・目的によって保護を主とする方針が貫かれているのであろう。日本からは日本河南同郷会を代表して副会長と事務局長が参加した。この会は日本在住の河南省出身者が作る団体で一般社団法人として2022年4月に正式に設立された。私も若干関わっているが約30名の役員を中心にさまざまな活動を展開している。

なお最後に、黄帝にまつわる大規模なイベントとしては別にそのお墓がある陝西省延安市黄陵県で毎年催される「黄帝陵祭典」が知られている。

## 「秦皇島」から「承德」へ

### 「避暑山莊・外八廟」駆け足旅行(3) 文と写真 吉光 清

秦皇島の知人から貰った地図の裏面を見ると、承德市の北側にあるのは「内蒙古自治区」で、南側と接する河北省の市は東から順に、「秦皇島市」「唐山市」「天津市」「北京市」であり、東側は「遼寧省」、西は「張家口市」に接していることが分かる。

「避暑山莊」の山域には「宮」「寺」「廟」「亭」「庵」などの名称が付けられた、20を超える建造物が山の中に点在し、「如意湖」「澄湖」「上湖」「下湖」「鏡湖」「銀湖」が加わった広大な地域全体の外周を、万里の長城並みに城壁が完全に取り巻き、更に、その外側を「武烈河」とその支流が流れて外堀の役目を果たしたことが見て取れる。

城壁の内外を繋ぐ門は、北側に一つ「西北門」、東側に「恵迪吉門」など3つ、南側に「碧峰門」「倉門」「麗正門」などの6つが見られる。皇帝が夏季にだけ滞在して政務を執る離宮であったので、(北京市などのように)城壁内に庶民の生活の場を囲い込む“惣構え”の形は見られない。

「熱河」と呼ばれたことから、温泉が方々にあるのかと期待したが、山莊内では「澄湖」の傍らに「熱河泉」があるだけであった。「承德县(県)」には「头沟温泉」という観光地が見受けられる。

#### ■仕方がないので、「殊像寺」へ

第2日目、6/24の朝、ホテルの朝食を済まし、前日の下見どおり、8時前に「避暑山莊」へ向かった。ところが入園券売り場は長い行列で人があふれていた(日曜日だった)。“入園を待って時間を無駄にすることは出来ない”と、先に寺院見物をはじめることにした。タクシー乗り場から、山莊北側の奥にある「殊像寺」(shū xiàng sì)を目指した。

北上する「山莊路」は左側の山莊と右側の武烈河に挟まれたままずっと続いていた。20分ほど走ると市街地になり、そこで、左折して山莊の北側に回り込んだら、今度は、武烈河の支流を左に見ながら西に向かって「环城北路」を進むことになっ



閉じられていた「殊像寺」の山門と門前の様子

た。依然として、歩道付きの立派な道路だが対向車は殆ど無かった。右手の山上に赤レンガ色の寺院が見えたので車内から写真を撮った。そこから車で5分ほど走って、右の脇道に入り、ひっそりした寺院の門前で降ろされた。

駐車場の趣は無く、門の周囲には人影も無く、駐車中の車も無い。門に近づいて見ると、扉は硬く閉ざされていた。未練がましく、横手の山の斜面を登って、横から内部を窺ったりしたが、人がいる気配は無く、せめてもと写真を撮った。

#### ■周囲を見回すと・・・

寺院前に戻り、改めて周囲を見回した。門の前には、白い石造りの標識があり、この寺院は1988年1月13日に「全国重点文物保护单位」として認められたことが記されていた。

門前の両脇には立派な獅子の像があり、金属製の柵で頑丈に囲われていた。ちょっと見慣れない光景だった。少し先まで歩いて見ると、大きな看板が立っていて、青地に白い文字で「河北省地震局承德中心台」とあった。何か奇妙な取り合わせであった。花や葉がまるでパラソルのように整えられた(刈り込まれた?)低木(鉢植えスタンド?)が数本並んでいた。傍には自転車が1台置かれていた。ひとつ気は無く、まったく静かだった。



寺院の屋根と彼方の岩峰らしき影、足元の朝顔

ここから門前に戻ろうとして回れ右をしたら、目の前には田舎道が東の方角にずっと続き、タクシーでやって来た道路と並行しながら、寺院群のある山裾を巻いて進んでゆけるようであった。

足元に咲いている花はよく見るとお馴染みの青紫色の朝顔であった。日本では蔓を上に伸ばして咲いている姿が普通なので、ちょっと意外だった。

この道の先にあるはずの「晋陀宗乘之庙 (jìn tuó zōng chéng zhī miào)」を目指して歩き始めた。

行く手に寺院の屋根が見え始め、その時になって、彼方の山上に奇怪な影が霞んでいるのに気付いた。建造物には見えないモノが「嘘だろう！」と言いたくなるような不安定さで屹立していた。慌てて地図を見て、「普宁寺 (pǔ nìng sì)」の方角だと確かめたが、その付近には何も記載されていなかった。

### ■「晋陀宗乘之庙」の山門をくぐって

10分ほど歩くと急に開けた場所に出て、そこは駐車場で、多くの自家用車が停まり、観光客も行き来していた。さっそく、駐車場を横切り、山門をくぐって境内に入ったが、再び広場になっていた。

赤レンガ色のどっしりとした建物が前に聳え、手前の焼香台のようなものの周囲を鉢植えの花が丸く飾っていた。行事があればチャンスとばかり、花で飾り立てるのが中国文化の一部のようだ。

入り口への階段の手前に建物の名称が「碑亭 (bēi tíng)」と示されていた。道端に置かれた石碑を風雨から保護するために設置された「屋根付きの祠」とは趣が全く異なる堂々たる建築物だ。



「碑亭」の「輪宝」と二層の屋根上の“何か”

入り口の左右には、大きな車輪のような文様が掲げられていた。後に文様を画像検索し、「輪宝<sup>りんぼう</sup>」という名称であることを確かめた。元々は古代インドの投擲用武器であったが、「説法が煩惱を破る」ことの象徴とされるようになり、「卍」と共に仏教の象徴ともなった。鎌倉時代には仏具としても製作され、銅製で塗金を施された輪宝が各地の博物館に収蔵されている。それらは密教の重要な儀式に使用され、地鎮用として地下に埋設された輪宝も、江戸城本丸跡などから出土している。

「碑亭」の建物は二層の建築物だが、周囲に建物が無い場所で、曇り空を背景に全体を見て“おやっ”と思ったのは、屋根の上を一行に並んで歩いている“小人のような何か”を見たからである。下層の屋根も同じようになっている（上の小さな写真）。

それまでも、中国の有名観光地の宮殿や寺廟を見てきたはずだが、多くは、人々が密集する人混みの中で、建築物を下から見上げ、扁額や内部の豪華な遺物を人々の頭越し、肩越しに見ることに夢中で、屋根の上を見る余裕など無く、注意を向けたこともついで無かった。

思いついて、先ほど境内に入れず、塀越しに撮った「殊像寺」の建物の写真を確認した（デジカメやスマホは、この点が便利である）。すると、“ここにも確かにあった！”のである。

“寺院の屋根上で行列する何か”がもっと見られるかと思い、「碑亭」の中の石碑は一瞥しただけで、境内を先へと進んでしまった。（つづく）

●資料：「承德市城区导览图」、中国地图出版社

## 白竜洞(峨眉山)

訳：一瀬靖子／大槻一枝

峨眉山の白竜洞に行くと、廟前に書かれた一対の対聯(対句を書いた掛け軸)が目に入る。“千古白竜伝佳話、七重宝樹倚雲栽(千古の昔から白竜は美談を伝え、七重の宝の樹は雲にそって植えられている)”これは白蛇がここで修業し、悟りを得たことを記した伝説である。

西天如来仏祖の蓮台の下に一匹の亀がいた。亀は毎日仏座の蓮台のかげで経を聞き、年を重ねるうちに、そのいくらかを聞き覚えてしまった。この日、亀は如来仏祖が経を上げている間に、こっそりと仏座の下から這い出し、雲に乗って空を飛びながら、修行して人間世界の享楽を味わえそうなどころはないかと、地上を見回した。すると眼下に峨眉山と言う有名な仙山が見えた。峨眉山には四季・八節(立春、春分、立夏、夏至、立秋、秋分、立冬、冬至)を通して花々が咲き乱れ、また仙人の住む洞穴もあると聞く。亀は、峨眉山に行ってみることにした。もしそこが本当に住みよければ、そこで修養を積めば、いまの生活よりずっとましだと考えた。亀は峨眉山に降り立ち四方を眺めた。峨眉山には十二の大洞穴、二十八の小洞穴があり、内部は静寂そのもの、しかも冬は暖かく夏は涼しい。亀は風景優美な清音閣付近の洞穴を選び、五百年の修行に入ることにした。

しかし修行の途中で亀は洞穴の生活に飽き、一刻も早く修行を終えて人間に変身し、山上で遊びたい気持ちでいっぱいになった。それにはまだ五百年の修行が必要だ。亀は毎日、後五百年の修行を一気に終える方法を考えた。ある時、亀は牛心寺に近い母砂洞で、孫思邈<sup>そんしほく</sup>仙人が洞内で金丹を練

っていることを耳にした。孫思邈仙人の金丹は、人が飲めば延命長寿、仙人が飲めばこれまで積んだ修行時間を倍増することができる。それを知った亀は、この金丹を盗むことにした。母砂洞に忍び込み、孫仙人が丹薬を練りながら居眠りをしていたので、こっそり一粒盗んで飲み込み、孫仙人が目覚める前に、慌てて洞穴を逃げ出した。金丹を飲んだ亀は、一挙に五百年の修行時間が加算された。亀は千年の修行実績を得、人間の姿になることができるようになった。ある時は無頼漢に変身して

婦女子をたぶらかし、ある時はまた温厚な和尚に変身して、居士(仏門に帰依する人)たちの金や財産を巻き上げた。亀の悪行に、人々は恐れをなして山に近づかなくなってしまった。

こんなことが白竜洞で修業していた白蛇の耳に

入った。この白蛇はすでに五百年の修行を積んでいた。白蛇は喉が渇けば泉の水を飲み、空腹になれば野生の果実を食し、決して洞外に出て騒ぎを起こすことはなかった。この日、白蛇が洞内で修業していると、突然洞外から叫び声が聞こえた。

「助けてー！」

見ると、無頼漢に変身した亀が若い娘を追いまわしている。娘は追われて髪を乱し、息も絶え絶えである。白蛇はこれを見て腹を立て、娘を助けたいと思ったが、亀の千年の修行に比べて、自分はまだ修行も浅く抗し難い。亀は娘をつかまえようと、手の届きそうところまで迫って来た。それを見た白蛇は一計を案じ、洞外に向かって大きく息を吐いた。忽ち砂塵が、あたり一面を覆い、伸ばした五指も見えない状態になった。砂塵が鎮ま



峨眉山白竜洞(百度百科)

るのを待って亀が目を凝らした時、娘はすでに逃げて、人影は見えなくなっていた。

ある日、白蛇は一日の修行を終え、首を伸ばして外の風景を見ていた。すると突然、空中に金の光を四方に発し回転する玉が見えた。よく見るとそれは、亀が盗んで飲み込んだあの金丹だった。亀は毎朝修行の間に、金丹を口から吐き出し、金丹に天地の靈気を吸わせて修行の効果を高める。修行が終わると、亀は再び金丹を腹の中にしまい込むのである。金丹は、亀が毎朝「吐いては飲む」動作することで、金の光を四方に発する神珠“夜光玉”に変わった。白蛇は空中で回転する“神珠”を見ると、頭を上げて“ホウー”と一息、神珠を吸いこんだ。亀は神珠を失って、修行年数が差し引かれたので、人への変身は出来なくなり、洞外での悪事も出来なくなった。白蛇は神珠を飲み、これまでの五百年の修行年数が倍増したので、鬘を結い白衣を着た娘に変身し、自ら白蓮仙姑と名乗った。

白蓮仙姑はバラの棘を取って息を吹きかけ、釣針に変え、カズラの木から蔓を引き寄せ、息を吹きかけて金の糸に変えた。金の糸に金の釣針をつけて亀の住む洞に垂らした。すると金光が閃き、釣針に亀の腹の皮が引っ掛かった。白蓮仙姑は亀を手に取り、東海の底に投げ捨てた。それ以来、峨眉山は平和になり、以前と同じように訪れる人も次第に増した。亀は白蛇に恨みを抱いたが、どうすることも出来なかった。

この日、白蓮仙姑は洞内での修行を終え、山上から風景を觀賞しようとして洞穴を出ると、向かいの山で薬草を掘っている若者を見かけた。若者は眉目秀麗、白蓮仙姑は一目で彼に好感を持ち、ゆっくりと近づいた。しかし若者は薬草取りに没頭し、少しも気づかない。白蓮仙姑は「娘の私から先に話しかけるのも…」と戸惑ったが、思い切って若者に近づき、数歩手前で突然地面にうずくまり、おなかを抱え、

「あ、痛い！ あ、痛い！」

と痛みを訴えた。若者は叫び声に気づき顔を上げると、若い娘が両手で腹をおさえ、地面にうず

くまって叫んでいる。大急ぎで歩み寄り、「お嬢さん、どこが痛いのですか」と訊く。娘は「朝飲んだ冷たいお茶のせいで、お腹が痛くなりました」と言う。

若者は、「大丈夫、私は良く効く薬を持っています」と言いながら丸薬を取り出し娘に渡した。娘は薬を飲み、落ち着きを取り戻した。彼女は立ち上がり、若者に、「有難うございました。貴方に頂いたお薬のお陰ですっかり良くなりました。貴方は何を掘っていらっしゃるのですか？」と訊く。

若者は娘の問いに、「薬草です」と答えた。

白蓮仙姑はまた「お家にご病人がいらっしゃるのですか？」

「いえ、私は薬草を持ち帰り植えるのです」

「どうして持ち帰って植えるのですか？」

「私の家は代々薬屋をして、人々に薬を与え、病を治しています。家では、この薬草がなくなり薬の調合が出来なくて、困っています。これを持ち帰り、薬草園に植えるのです」

「貴方のお名前は？ ご様子から見ると、この土地の方ではないようですが？」

「私は許仙と申します。杭州清波門外に住んでいます」

白蓮仙姑と許仙はこうして互いに知り合った。その後、白蓮仙姑は毎日許仙の薬草採りを手伝い、許仙はまた仙姑に薬草について話し、その治療についても話した。こうして二人は次第に心を通わせ、親密になっていった。薬草を掘り終え、許仙が杭州へ帰らねばならない日が来た。女性の白蓮仙姑を同行するには都合が悪く、二人は互いに、後髪を引かれる思いで、名残を惜しみながら別れた。

許仙が去った後、白蓮仙姑は日夜許仙を偲び、白衣をまとして白娘と自称した。その後、彼女は杭州の西湖に飛び、許仙と夫婦の契りを結んだ。白蓮仙姑が峨眉山で修業錬磨した洞穴を、人々は今も“白竜洞”と呼んでいる。

~~~~~

■この文には著作者名がない。文面から見ると中国四川省峨眉山の言い伝えのようだ。

# 新渡戸稲造と台湾(1)

和田 宏

## <万能の人、新渡戸稲造>

新渡戸稲造(1862年9月~1933年10月 享年71)は、私の最も尊敬する人である。幕末の文久2年、盛岡で南部藩勘定奉行の新渡戸常訓と勢喜の間<sup>つねのり</sup>に生まれた。

札幌農学校で学び、東京大学を中退してアメリカ、ドイツの大学に留学。クエイカー教徒で5歳年上のアメリカ人女性メアリー・パターソン・エルキントン(1857年8月~1938年9月 享年81 日本名:萬里子)と結婚し、帰国後は母校・札幌農学校の教授、台湾総督府技師、一高校長を務め、東京大学教授、そして、東京女子大学の初代学長になり、人格と教養を重んじる教育を実践した。一方で、高等教育の機会が得られない人々に対する啓蒙書を沢山著した。

1920年から6年間、国際連盟の事務局次長を務め、貴族院議員に勅選された。晩年は、日米戦争の回避のため、命を懸けて死の直前まで奮闘したが、1933(昭和8)年、講演先のカナダで客死した。71歳だった。

1984年には五千円札の肖像画に採用されている。彼は学者、教育者、行政官、外交官など多方面で活躍した万能の人だったが、その中で、彼の私生活と台湾との繋がりを中心に紹介しよう。

## <「太田稲造」として「札幌農学校」へ>

稲造は5歳で父を失い、1871(明治4)年、9歳の時、勉学のため叔父の居る東京へ、次兄と一緒に盛岡から駕籠に乗り、11日間かけて上京し、太田時敏<sup>ときとし</sup>の養子になった。12歳で東京英語学校に入り、1877年9月、15歳で札幌農学校の二期生となった。



羊が丘展望台のクラーク博士像  
(北海道開発局 HP より)

札幌農学校は日本で初めて学士号の授与権が付与された高等教育機関で

あり、その後、東北帝国大学農科大学、北海道帝国大学、そして現在の北海道大学へと発展した。札幌農学校時代の建造物は、現在でも北海道大学構内などに数多く残されているが、札幌市に移管された旧演武場は「札幌時計台」として市民に親しまれている。

“Boys, be ambitious! (少年よ、大志を抱け!)”の名言で知られるウィリアム・スミス・クラーク博士は、マサチューセッツ農科大学における三代目学長(開学後の初代学長)であったが、同大学に留学していた新島襄の紹介と、日本政府からの熱烈な要請を受けて、1876(明治9)年7月に教頭(英語で「President」と表記することが開拓使によって許可され)、実質的な学長として赴任し、マサチューセッツ農科大学のカリキュラムをほぼそのまま札幌農学校に移植し、諸科学を統合した言語重視の全人的な教育カリキュラムを導入した。

マサチューセッツ農科大学から1年間の休暇を利用して訪日するという形だったので、稲造が入学した時は、クラーク博士が帰国した直後だったが、札幌農学校では全ての授業が英語で行われ、キリスト教メソジスト系のメリマン・コルバート・ハリス宣教師による聖書の授業もあった。

稲造は元気いっぱい、行動力のある少年だったので、あだ名は、“アクティブ(活発な)”だったが、ハリス宣教師から16歳で洗礼を受け、洗礼名を“パウロ”とつけられた後は大人しくなり、友達に、“喧嘩をしてはならない。聖書を読み給え。”と諭していた為、東京英語学校と札幌農学校で同級生だった内村鑑三が、“太田稲造はもうアクティブとは言えない。あだ名を変えよう”と言って、「モンク(修道士)」に変えた。

## <母の死の悲しみと、座右の銘>

母親からは、“ちゃんと勉強を終えるまでは女々しく親を慕ってはいけない、決して帰って来な。勉強を終えてから帰って来なさい!”と強く言われていたので、9歳で上京し、その後、札幌農学校に入学し

た後も一度も帰省していなかった。

マザコンの稲造は母親に会いたくて仕方なかったらしい。1880年、18歳で札幌農学校を卒業し、“これでお母様にも9年ぶりに会うことが出来る”と喜びながらも、札幌から盛岡まで帰る途中、“ついでだから”と十和田湖を見物して帰ったのだが……。そのちょっとした間に、“母危篤”という電報と行き違いになってしまい、我が家に着いた時は、母は3日前に56歳で亡くなっており、葬儀も済んだ後だった。この出来事は、稲造にとって深い深い悲しみとなり、毎年、母の命日の7月17日には部屋に独り引き籠り、母親の手紙を読んで静かに偲んでいたと言う。

母の死後間もない頃、稲造は授洗者のハリス宣教師がアメリカへ帰国するので、横浜の家に手伝いに行った際、書棚でスコットランドの思想家トーマス・カーライルの『サーター・リザータス（衣装哲学）』を見つけ、譲り受けた。以前から読みたいと思っていた本であり、稲造は繰り返し読んだ。

この本のエキスが、“最も身近な義務を果たせ”であり、その後の稲造の座右の銘となった。

### <「新渡戸」家を継ぎ、改宗と結婚>

札幌農学校を卒業し、2年間の開拓使御用掛を経て1883年、東京帝国大学に入学するも農学校と比べ、授業のレベルの低さががっかりして、1年で自主退学し、その後、アメリカへ私費留学した。

1886年、24歳でボルティモア市のジョンズ・ホプキンス大学の大学院生になっていた時に、キリスト教フレンド派の会合に顔を出すようになり、メアリー・パターソン・エルキントンと出会った。フレンド派は祈っているうちに身体が振るえてくるので、クエイカー教とも言われる。稲造もクエイカー教に改宗した。

二人の兄が亡くなったため、稲造は27歳で新渡戸家を継ぎ、「太田」姓から、「新渡戸」姓に戻った。稲造が札幌農学校助教授に任命され、アメリカからドイツに移ってから愛の手紙の交換が続き、1891年1月1日、28歳で、33歳のメアリー（萬里子）とフィラデルフィア市のクエイカー教の集会場で結婚式を挙げ、2月に帰国した。

札幌農学校の教授をしていた1892年1月に一人

息子の遠益<sup>トーマス</sup>が誕生したが、悲しいことに8日後に夭折してしまった。

### <「遠友夜学校」と「永遠の幸」>

二人は悲しみに打ちひしがれたが、たまたま、萬里子の実家から千ドル（現在の2000万円に相当）の大金が送られて来た。使い道を相談し、貧乏で昼間働いて、義務教育すら受けられない少年少女のための学校を作ろうという事になった。1894年に設立された『遠友夜学校』では授業料は取らなかった。

『遠友』の由来は、論語にある“有朋自遠方来不亦乐乎”であり、遠く離れた者同士が友となって一緒に学べる楽しさを表している。

稲造は“With malice toward none, with charity for all（誰に対しても悪意を抱かず、全ての人に対して愛を持って）”と揮毫した額を学校に贈った。この英文は、エイブラハム・リンカーンが、



新渡戸稲造(56歳)と萬里子夫人  
(ウイキペディアより)

1865年3月4日、2回目の大統領に就任した時の演説文の一節である。

札幌農学校に在職していた有島武郎は、校歌『永遠の幸（とこしえのさち）』を作詩しており、北海道大学の校歌として歌い継がれている。メロディーは、アメリカの南北戦争時に歌われた北軍の行進曲『Tramp! Tramp! Tramp!』である。クラーク博士も、稲造に洗礼を授けたハリス宣教師も北軍軍人として従軍した経歴があり、そのメロディーを活用したのだろう。リンカーン大統領も口ずさんだに違いないメロディーが太平洋を越えて日本に伝わったのである。

ちなみに、早稲田大学校歌『都の西北』は東儀鉄笛の作曲とされているが、イエール大学の学生歌『Old Yale』のメロディーを編曲したものである。

(つづく)

新刊書「彼女たちの山 平成の時代、女性はどう山を登ったか」から  
「唯一無二の存在」について

須崎孝子

皆さんは「サガルマータ」と言う山を知っていますか。「エベレスト」はご存知ですね。

そう！地球上で一番高い山、中国とネパールの国境にあって、多くの人はこの山を「エベレスト（発見者・インド測量局初代長官の名にちなむ）」と呼んでいます。なぜなら世界で最初にこの山の登頂に成功した人が、ニュージーランドの登山家、エドモンド・ヒラリー（1953年）だからです。ですから、英語名になったのでしょう。もし最初に登頂に成功した人が中国人だったら、多くの人はこの山を「チョモランマ（大地の女神）」と呼んだのではないのでしょうか。ネパール語では「サガルマータ（大空の頭）」と呼ばれます。

1975年5月16日、ヒラリー氏の登頂成功から22年後、エベレスト登頂に最初に成功した女性がいます。それは日本人の田部井淳子さんです。でもなんと、その

たった11日後に同じく登頂に成功した女性がいます。それは中国人チベット族のパンドウさんです。

1988年、私はパンドウさんと運命的な出会いをします。当時、私は日本のスポーツアパレルメーカーに勤めていました。日本の多くの縫製工場は中国に安い人件費を求め、合弁会社を造り工場を中国に移転するのが主流になっていました。私が勤めるアパレル会社も上海に工場を造り本格的に海外工場を稼働させる計画をもっていました。

その上海工場のオープニングセレモニーに貴賓として招待されていたのが、パンドウさんでした。パンドウさんはチベット族らしく体格が良く声量もあって、アカペラでチベットの歌を披露していました。歌を歌い終わった後に、私に近づいてきて「あなた、ティンブーチン・チュンズを知っている？」と訊いてきました。リンムー（鈴木）とかティエンジョン（田中）だったら分かって、いきなりティンブーチン・チュンズと言われても私にはチンプンカンプンでした。

そこで「ここに書いていただけますか」とノートを渡すと「田部井淳子」と書かれました。「だれだろう？」と思った時はもう遅く、「あなたは日本のスポーツ業界にいて、田部井淳子も知らないの！」と言われてしまいました。それから、パンドウさんの夢である、彼女と田部井淳子さんとの対面を叶える、私の大作戦が始まりました。



田部井淳子さんとパンドウさん  
上海にて（2006年3月筆者撮影）

日本に帰って調べてみると田部井さんは世界でも有名な登山家でとても私が訪ねることができそうな方ではありませんでした。私にとっては、全く雲の上の人！でも、十数年の歴史を経て、私はお二人の対面に成功しました。

お二人には共通点も多く、エベレストに登った時、田部井さんは35歳、パンドウさんは37歳でした。登山家ママです。ご主人も登山家です。田部井さんはエベレス

トに登る相談をご主人にされた時、ご主人は「お願いが一つある」と言われたそうです。何だと思いませんか。これはNHK番組のクイズにもなりました。答えは「子どもを産んでから行ってほしい」です。なんと素敵なお主人だと思いませんか。

今年（2023年）3月、柏澄子著『彼女たちの山 平成の時代、女性はどう山を登ったか』が山と溪谷社から出版されました。平成に登った5人の女性の中で「田部井淳子さん」が紹介されています。その中に「唯一無二の存在」のサブタイトルで田部井さんとパンドウさんのことが紹介されています。僭越ながら私の事も出てきます。

田部井さんは7年前、パンドウさんは9年前に既にこの世を去りました。でもお二人は天国で再び山をたのしんでいらっしやることなのでしょう。天国は一つですから私の通訳も必要ないですね。

みなさんにもこの本を手にとっていただけたら嬉しく思います。

## なぜ漢詩を読むのか？

後藤芳昭

僕は、生きる力を得るためと答えます。

曹操の詩に、「老驥伏枥 志在千里 烈士暮年 壯心不已」(老いた駿馬が厩に雌伏しても志は、はるか千里を駆け巡る。節義の士は、老齢になっても心意気は萎えることはない。)

三国時代魏の英雄が老齢になって詠じた詩です。

曹操と聞けば、赤壁の戦いで呉・蜀の連合軍の敗戦の将で悪者との見方が多いのですが、後漢最後の皇帝献帝を迎えて、官渡の戦いでは、わずか2万の兵で北中国の袁軍13万の大軍を破った大將軍。しかも文人を広く集め、優遇し雄渾な独自の氣風を醸成しました。(NHKカルチャーラジオ「漢詩をよむ」4月～9月テキストより)

曹操の詩から、老いた我が身に大いに生きるヒントをもらいました。

漢詩の歴史は長く、多岐にわたりとても一言では語れません。

漢詩から得られるものも各人各様。

僕は、人生を賢く生きる宝の宝庫と思い、漢詩の世界を楽しみたいものと思います。

～・～・～・～・～・～・～

### ■雲仙普賢岳 噴火の跡

今年のゴールデンウィーク、会員の佐々木真理子さんは、ご主人と一緒に雲仙岳に登られました。今月と



写真1: 噴火による土石流被害の遺構(島原市)



写真2: いまでは雲仙の主峰となった平成新山(普賢岳側から)

来月でその時の写真をご紹介します。

雲仙岳と言えば、1991年6月、死者43名、行方不明9名、被災建物179棟の被害を出した大火砕流災害を思い出します。いま現地がどうなっているかを知りませんでした、遺構がそのままの状態が残されているのだそうです(写真1)。

一連の噴火の結果、新しい頂上付近に溶岩ドームが形成され、1996年に「平成新山」と命名されました(最終高度:1483m)(写真2)。

### ◇満柏画伯の漢訳俳句◇

蛸壺や

はかなき夢を夏の月

松尾芭蕉

zhāng yú qī shēn chù  
章鱼栖身处

táo hú kōng yǒu wū  
陶壺空有屋

xū miǎo xià yè mèng  
虚渺夏夜梦

hǎi yuè míng rú zhū  
海月明如珠

【わんりいの催し】  
皆様のご参加を歓迎します

♪ ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体の力を抜いて気持ちよく発声しよう！  
声は健康のバロメーター！！

\*動きやすい服装でご参加ください。

- 会場：まちだ中央公民館 美術工芸室
- 日時：6月27日（火）10：00～11：30  
7月18日（火）10：00～11：30
- 講師：Emme [エメ]（歌手）
- 会費：1,500円（講師謝礼・会場費）
- 定員：15名（原則として）
- 申込：☎042-735-7187（鈴木）

~~~~~

\*\*\* 中国語で読む 漢詩の会 \*\*\*

漢詩で磨く中国語の発音！ 中国語のリズムで読んで漢詩のすばらしさを味わおう！

- 会場：まちだ中央公民館 視聴覚室
- 日時：6月18日（日）10：00～11：30  
7月30日（日）10：00～11：30
- 講師：植田渥雄先生  
桜美林大学名誉教授
- 会費：1,500円（会場費・講師謝礼）
- 定員：20名（原則として）
- 申込：☎090-1425-0472（寺西）

Email:ukiuki65jpp@yahoo.co.jp  
(有為楠)



■6月・7月定例会 代表宅

- ▼6月8日（木）13：45～
- ▼7月13日（木）13：45～

■‘わんりい’ 発送 三輪センター

- ▼7月号 7月3日（月）
- ▼8月号 休 刊

☆☆ 編集後記 ☆☆

最近、私たちの住む周辺では、麦畑を見なくなりましたね。昔は住宅地の中に残った小さな畑にも麦が植えられ、寒風のなかで麦踏みをする人の姿が、冬の風物詩でしたが、今はもう思い出の中に残るだけです。

経済が成長する間に、畑は住宅地に変わり、わずかに残った畑には野菜が植えられ、小麦は見られなくなりました

もっとも、小麦生産日本一の北海道では、見事な麦秋がツアーに組み込まれ、人々を感動させます。北関東諸県も、小麦生産量ベスト10に入るように頑張っています。

それでも日本人の小麦の消費量には到底足らず、85%を輸入に頼っているそうです。最近になってやっと、食糧安全保障という観点から、食糧自給率を考えるようになって来ました。間に合えば良いのですが。

~~~~~

‘わんりい’は、新入会をいつでも歓迎します  
年会費：1800円、入会金なし

郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりい  
10月以降の入会は、当年度会費1000円

■問合せ：044-986-4195（寺西）

‘わんりい’ 284号の主な目次

|                                |    |
|--------------------------------|----|
| 寺子屋 四字成語(63)『口若懸河』……………        | 2  |
| 「日译诗词」(33) 唐寅の七言絶句「画鷄」……       | 3  |
| 「漢詩の会」報告 (66)<br>文天祥「零丁洋を過ぐ」…… | 4  |
| 「中原雑感」(32)「黄帝祭典の開催」……………       | 6  |
| 「避暑山荘・外八廟」駆け足旅行 (3)……………       | 8  |
| 「白竜洞 (峨眉山)」……………               | 10 |
| 「新渡戸稲造と台湾」(1)……………             | 12 |
| 「彼女たちの山」から「唯一無二の存在」……          | 14 |
| みんなの広場……………                    | 15 |
| ‘わんりい’の催し・お知らせ……………            | 16 |